

特集<言語地図>

フランスにおける言語地図について

矢 島 猷 三

フランスにおける言語地図の創始者は Jules Gilliéron であり、彼の手になる「フランス言語地図帖」はのちにロマンス諸語の言語地図帖編纂の手本になるのだが、言語現象の広がりや言語地図によって示そうとした最初の人にはドイツ人 G. Wenker である。彼は青年文法学派の旗印である音声法則の規則性が明確な方言境界線として言語地図に現われるものと考え、それを確めるべく四十の文章から成る質問書を小学校の先生達に送り、回答を集めて最初の言語地図帖を作った。1881年に第一分冊のみが刊行された *Sprachatlas von Nord- und Mitteldeutschland* ……がそれである。しかし言語地図の資料が正確で信頼に値するものであるためには、ヴェンカーのように通信回答によるのではなく、編纂者が被問者に面接する直接的な方法がとられなければならない。ジリエロンはすでに *Petit Atlas phonétique du Valais roman* でこの方法を試みていたが、続く一大金字塔たる *Atlas linguistique de la France* (1902~10) [:ALF] ではそれがより大きな規模で適用されることになる。

ジリエロンはフィールド・ワークの専従者として Edmond Edmont を選んだ。彼は生粋の方言学者ではなかったのでこの点を非難する者もいたが、ジリエロンはフランス全土がただ一人の調査員によって調査される場合の結果の等質性を重要視しており、また言語研究に素人の者の方が先入観を交えずにかえって純粋な言語状態を採集できると確信していた。一方エドモンもジリエロンの期待に十分応えるだけの繊細な聴覚を備えており、天性の性質から容易に被問者の間に溶け込むことができたといわれている。エドモンの調査は1897年の8月から始まり、1901年の終りまで4年半の間休みなしに続けられた。この間彼は639の地点を、あらかじめ準備された質問書を片手に踏査したのである。被問者にはできるだけ純粋に土地の言葉を保存していると考えられるその土地出身の者が選ばれ、また質問にあたっては被問者なるべく自然の状態で回答できるよう配慮がなされた。

選ばれた639の地点はフランス全土を覆いつくしているわけではない。ジリエロンの意図がガロ・ロマンス語領域の調査にあったので、ブルターニュ地方のブルトン語地域、東北部のフラマン語地域、南西部のバスク語地域、それに東端アルザス地方のドイツ語地域は除外されている。その代りフランス領には属さなくても、ベルギーの南半分を占めるワロン方言地域、スイス西部のフランス語地域、イタリア北西部のピエモンテ地方は調査の対象となっている。

ヴェンカーの地図帖では重点が音声面に置かれていたが、ジリエロンの地図帖では中心は語彙にある。1900語から構成されている質問書には俚語の状態を知るために農村の日常生活に関するものが多く含まれており、また中央からの語の伝播の様子を知る目的で、新語も入っている。このほか文法形態や統辞法に関するものもあり、採集された語形はいずれも音声的に表記されるため、同時に音声面の研究に資することはいうまでもない。

エドモンによって調査された結果は、おのおのの地点で調査が終るたび毎にバリのジリエロンのもとに送られた。ジリエロンは中央にあって、専ら地図の作製に専念したのである。

地図帖は1902年から10年にかけて逐次刊行された。第1分冊ではまず調査地点の名称と番号が示され、次いで俚語による地点名、住民名の一覧が続き、以下地図の本体がabeille, aboyer, à l' abreuvoir, à l' abri, absinthe…とABC順で始まる。俚語は各地点を示す番号の傍に綴字的音声記号および補助記号をもって記されているが、補助記号のうちアクセント記号は調査の初期には記されず、調査開始後156番目の地点から規則的に記入されている。また調査の途中で新しい調査項目を追加したために、一部の地図には空白部分があり、さらに南部だけの地図がある。調査開始後に方法を練り上げて行った痕跡といえよう。地図帖は総計35分冊におよび、項目数は1900、一つ一つの俚語形を数えれば、その数100万以上にのぼる。なお地図帖本体のほかには地図帖の使用を容易ならしめるためNotice servant à l' intelligence des cartes という説明書が1902年、第1分冊刊行の年に出されており、これには成立までの経過の概略が述べられているほか、見出し、調査地点の番号、略号、音声転写法などについて実際に地図を読む場合の留意すべき点が記されており、さらに調査の順序と調査地点の対照表および調査地点名と被問者の職業、年齢、俚語の特徴の一覧が加えられている。このほか付属書として地図帖に現われる全俚語形と標準フランス語の対応形を示したTable de l' Atlas linguistique de la France (1912)があり、また1920年には調査中にたまたま採集された語形を集めたSupplémentsが出ている。

ジリエロンの言語地図帖に続いて、より狭い範囲の俚語を対象とした言語地図帖およびこれに類する著書が出版されている。いずれもジリエロンの弟子の手になるもので、限られた範囲により高い密度でジリエロンの方法を適用したものである。まず1910年にはG. Millardet がPetit Atlas linguistique d' une région des Landes. Contribution à la dialectologie gasconne. と題する地図帖を公けにしている。これはガスコ-ニュ方言に属する南西フランスLandes地方の俚語を対象としたもので、主として音声面での境界線の様子を知るために800項目の質問書によって85地点を調査し、その結果を573葉の地図にまとめたものである。

つぎにCh. Bruneau はフランス北東部に位置するArdennes 県を調査し、その結果をEnquête linguistique sur les patois d' Ardeme (vol. I 1914, vol. II 1926) によって示した。ジリエロンの質問書を利用した直接の現地調査のほか、この地方の小学校教師の通信回答を使った間接的方法も採用している。この地方が言語的にはシャンパーニュ方言、ロレーヌ方言、ワロン方言の3領域にまたがっているために、調査された93地点はアルデンヌ県だけでなく隣接のベルギー領、ルクセンブルグ領にまでおよんでいる。ブリュノ-の著書には89葉の音声と語彙についての地図帖が付されているだけだが、調査の回答をアルファベット順に整理した本文もそれぞれの語について注解が加えられているので地図と同じような価値がある。

A. Terracherの調査はフランス語とプロヴァンス語の境界領域Angoumois地方の俚語に関するものである。彼は俚語の変化を結婚によって生ずる住民の移動と結びつけて考察した。つまり言語地理学的研究を社会学的研究と結合せしめたのである。その結果はLes aires morphologiques dans les parlers du nord-ouest de l' Angoumois (1800~1900). (vol. I 1914, vol. II 1912, vol. III 1914) に示されている。うちvol. IIIは副題がAtlasとなっており、定冠詞の複数、名詞の複数など文法形態に関する調査結果と並んで住民の定着度や異った村落間の通婚の様子なども図示されている。

またO. BlochがAtlas linguistique des Vosges méridionales (1917) で扱ったの

はロレーヌ方言圏に属するヴォージュ山地の俚語である。地図帖は810葉におよんでおり、調査内容は前三者と異って音声、形態、統辞、語彙の各領域を網羅するほか特に標準フランス語の俚語への影響にも注意が払われている。調査地点は22ヶ所だがうち2地点はALFのものと同じであり、さらにエドモンの調査時に被問者であった1名の同一人物にも再調査を行っている。多少の食い違いは発見されたものの、ALFの調査結果は信頼に値するものだと著者は述べている。

ジリエロンの「フランス言語地図帖」が当初予想したものを遙かに越える結果をもたらしたことは周知の事実である。それはフランス語方言学、フランス語史の研究に多大な影響をもたらしただけでなく、歴史言語学の理論にも刷新を迫ることになる。しかし時の経過と共に、この地図帖をより完全なものにすると同時により新しい資料を集める必要が痛感されるにいたり、またその気運が高まって来たのも当然の成り行きであった。1939年に当時のフランス言語学界の指導的地位にあった Albert Dauzat は、雑誌 *Le français moderne* (四月号および十月号)に *Un nouvel Atlas linguistique de la France* [: NALF] と題する新しいフランス言語地図帖編纂の計画を発表している。一層精密な地図を作る必要からフランスを幾つかの地方に分け、それぞれの地方で専門家のグループによる地方別言語地図帖を作ろうというのが計画の骨子で、しかもそれぞれの地方別言語地図帖に独自性を認めながらも、同時に全体としては統一のとれたものにしようというものであった。この趣旨にもとづいてフランスは方言的に大よそのまとまりを示す13の地方に分けられ、地図帖編纂の中心地(大学の所在地)が示された。即ち、北部とピカルディ地方(リール)、シャンパーニュ・ロレーヌ地方(ナンシー)、ブルゴニュ・フランシュコンテ・ニヴェルネ地方(ディジョン)、イルドフランス・オルレアネ・ベリ地方(パリ)、ノルマンディ地方(カーン)、西部地方(レンヌ)、ポワトゥー・シャラント地方(ポワティエ)、リムザン・オーヴェルニュ・ブルボネ地方(クレルモン・フェラン)、フランコプロヴァンサル方言地方(リヨン、グルノーブル)、プロヴァンス・ニース地方(エクス・アン・プロヴァンス)、ラングドック地方(モンペリエ)、ギューイエンヌ地方(トゥールーズ)、ガスコニュ地方(ボルドー)。なお同じ雑誌の十月号には各地方の編纂責任者の名があげられている。以上によって判るように、ジリエロンによって調査されたベルギーとスイス、イタリアのフランス俚語領域は除外されている。これは当時すでに J. Haust による *Atlas linguistique de la Wallonie* と K. Jaberg および J. Jud による *Sprach- und Sachatlas Italiens und der Südschweiz* が進行中であったので、この地方の俚語の調査はそれぞれの専門家にまかせようと考えられたからである(その代りALFで扱われなかったアルザスやバスク地方を含める意向であることが同じ雑誌に述べられている)。

またドーザは質問書は原則としてジリエロンとエドモンのものによること、うち大部分は地方別言語地図帖の全部に共通のものだが一部は各地方独自のものとするのが許されると提案した。さらに、ALFの調査にあたったのはエドモン一人であったが様々な不便を考慮してNALFでは複数にすること、そしてそれぞれの地方の俚語のみならず農民の習慣や心理にも通じている必要から調査者は地方出身者であることが望ましく、このような俚語調査の専門家を養成するために各大学で学生達に方言学の学士号や博士号をとるよう指導につとめることを勧めている。現地調査は二段階に分けられ、まず予備調査を行って調査地点とそれぞれの地方に独特の質問事項を定め、ついで正式調査に入ることになる。調査地点はALFのものを最低二倍に増やす必要があり、また半世紀後の変化を知るためにALFの調査地点

を再調査するのが望ましい。正式調査では一ヶ所で最低2人の被問者にあたること、そして調査員が複数になるので質問方法や表記法に統一が保たれるよう、あらかじめ配慮がなされなければならない。地図帖の編纂に際しては、言語地図帖のほかには俚語の背景を知るために、政治的境界や教区の境界などの変遷を示す歴史地図、それぞれの地方に特有の住居や道具の様子を示す民俗学的アルバムを付すことになる。

以上のようなドーザの編纂計画にもとづいて発足した地方別のフランス言語地図帖は、第二次大戦とそれに続く困難のさなかでも準備が進められ、その刊行は現在でも続けられている。全部の地方の刊行が終了していないため、詳細を比較検討してみる段階にまでは至っていないので、ここでは最初に言語地図帖3巻の出版を終えたP. GardetteのAtlas linguistique et ethnographique du Lyonnais [: ALLy]を中心にNALFの実際の編纂の模様を検討することにする。この地図帖は正式計画に着手してから3年間(1942~45)を質問書の準備にあて、続く3年間(1945~48)に現地調査を行い、以下2年後(1950)に第1巻、次の2年後(1952)に第2巻、さらに4年後(1956)に第3巻が出版されて言語地図帖の部分は終り、その後12年たってから別巻として方法を解説した第4巻が現われて一応の完成をみたものである。今後なお地図の解釈と語源一覧についての第二別巻が予定されている。

この地図帖を編纂するにあたってガルデット神父は独自の質問書を使用している。ドーザは地方別言語地図は全国的に統一のとれたものが望ましいという考えから、ALFの質問書を修正して全国共通の質問書を作製したがこれは利用されなかった。というのはこの共通質問書は豊富な俚語を網羅するには十分でなく、全国的な統一を犠牲にしても純粋な数多くの俚語を採集する方が重要だと考えられたからである。また共通質問書を使うとABC順の配列が災いして実際の調査には大変使いにくいという難点もあった。そこでガルデット神父自身新しい共通質問書の作製を提案したのだがこれは受け入れられるところとはならず、結局進行中の地方別言語地図帖はそれぞれ独自のものを使っているようである。もっともこれによってそれぞれの地域が全く異った事物を調査の対象にしているというわけではない。編纂者が既刊のものを参考にすることもあって、実際にはかなりの重複が見られる。これは各地方別言語地図帖が多くの場合それぞれの地図の片隅にそれまで出版された言語地図帖の対応する地図番号を掲げていることによっても判る。

ALLyの質問書は、「牧場と乾し草」「種蒔き・収穫」の如く事象別に31章に分けて編纂されており、各章平均約50項目の質問を備えている。これは調査の場合の一区切り(1~2時間)を目安としたものである。ALFの質問ではどれが肝腎な語なのかははっきりしない欠点があったが、これを避けるためにそれぞれの質問は一語を正確に答えるように工夫がこらされている。質問の対象は農村生活に密着したものに限られ、抽象的なものは入っていない。質問書の分類方法を反映して、でき上った言語地図帖も事象別にまとめられている。これは他の地図帖でもほとんど踏襲されている形式である。今ALLyの地図の大項目を示すと次のようになる： 1 牧場と乾草, 2 種蒔き・収穫, 3 脱穀, 4 くびきと突棒, 5 鋤と耕作, 6 車と運搬, 7 ぶどう・ぶどう酒, 8 木材, 9 庭, 10 牛, 11 山羊・豚, 12 めん鳥, 13 養蜂所・犬と猫, 14 牛乳, 15 パン, 16 樹木と植物, 17 果樹, 18 鳥類・ハエ類・寄生動物, 19 有害動物・水中動物・昆虫, 20 寝台・家事・食事, 21 洗濯・裁縫, 22 家一般・入口・窓・台所, 23 ランプ・火・家の付属部分, 24 風・雨・雪・太陽, 25 星・土地の起伏, 26 歳月, 27 一日・血族関係, 28

揺りかごから墓場まで、29 身体、30 衣服・麻・その他、31 文法形態。

ALLyの調査員は6人である。ガルデット神父を除く5人はいずれも彼の弟子で、調査地域の俚語を専攻する者ばかりである。従ってALFのエドモンとは異り、全員が専門の方言研究者ということになる。さらに調査員は全てこの地方の生れであり、うち2人は自由に俚語を操ることができる。なお4人は女性調査員である。

調査地点は対象となったロ-ヌ県・ロワ-ル県から44ヶ所が選ばれた。ALFは同じ範囲に8つの調査地点を設けているのみだから、かなり高い密度の調査網ということができよう。これに加えて境界線の様子を知る必要から、さらに周辺部の31地点が調べられた。総計75地点となる。ALF8地点のうち4地点がALLyのものと重複し再調査されている。残りの4地点は半世紀の間に都会化してすでに固有の俚語を失ってしまったため、再調査は断念しなければならなかった。

被問者には原則として農民が、しかもその土地に住んでいた両親から生まれ、土地の内部の者と結婚し、ひき続いてその土地に住んでいる者が選ばれた。純粋に俚語を保っているのはこのような層の人々に限られるからである。エドモンは役場の書記や職人を好んで被問者としたが、今回はそのようなわけにはいかなかった。またエドモンの被問者の平均年齢が40歳なのに対してALLyは70歳となる。ALFと異ってALLyの被問者の数は1地点1名ではなく複数である。場合によっては同時に数人を集めて調査することもあった。これは被問者同士話し合うことができるので一人では不十分な答を補足できるという利点があり、同時に調査にとって好ましい自然の雰囲気を作り出すためにも効果をもたらすものであった。

調査にあたって何よりも重んじられたのは被問者から自発的な回答を得るということである。そのためには「あなたの俚語でコレコレを何と云いますか」といった翻訳調の質問はぜひ避けねばならない。そうしないと被問者が固くなって自然に俚語が出てこなかったり、標準フランス語のなぞりを答えてしまう危険がある。従って調査の流れがスム-スに行くように、この流れの中で回答者が自ら進んでテーマを発展してくれるように、質問書の構成には長年の予備的調査の体験からえられた入念な配慮がほどこされている。こうなると調査時の調査員の役割は、いかに少ない言葉で会話を望む方向へ導いて行くかということになる。このためには補足的な手段として身ぶりや手まね、さらには物にさわったり、スケッチをしてみせたりも必要になってくる。時には回答を誘い出す方法として、予想される答の最初の音節を示すこともあった。以上はいずれも調査員の間であらかじめ検討・準備された方法である。調査結果は前もって定められた表記法によって、その場でノートに書き込む伝統的方法がとられた。のちの地方別言語地図帖にはテープレコーダーを使っている例もみられるが、この方法には一長一短があるようである。何度も繰り返すことができる；回答者のためらい、追加など現場での様子がよく判る；現地調査の流れを中断する必要がないので調査時間を節約できるほか、調査時に自然の状態を保つことができる；などは確かに利点だが、反面、全部を聞かねばならないので大変な時間がかかる；唇の動きを見ることができないので表記が不正確になる恐れがある；調査時の雰囲気までを知ることができない；などは短所と認められねばならないであろう。

ド-ザが示した民俗学的事物のアルバムは、地方別言語地図帖の最初のものであるALLyにおいてすでに採用されている。続いて現われた他の地図帖もこれにならっている。図版はそれぞれの地図の傍に、また各巻末にまとめて示されている。歴史地図など俚語の背景となる諸事情の図示については、ALLyのように別巻に簡単に地形とロ-マ時代の交通路だ

けを示したものから、「ピレ-ネ山脈東部言語地図帖」のように地形、河川の分布、気候からはじって各時代の政治的・宗教的境界をも詳しく描いたものまで様々である。

最後に今まで刊行されたフランス言語地図帖と出版予定のものの一覧(ALF とNALF)を掲げる。

J.Gilliéron et E.Edmont:

Atlas linguistique de la France	1902 ~ 1910
Atlas linguistique de la France	
Notice servant à l'intelligence des cartes	1902
Table de l'Atlas linguistique de la France	1912
Atlas linguistique de la France Suppléments I	1920
(Honoré Champion, Paris, 最近 Forni Editore, Bologna によりリプリント)	

以下の NALF はいずれも CNRS: Centre National de la Recherche Scientifique の出版である。

(既刊のもの)

P.Gardette:

Atlas linguistique et ethnographique du Lyonnais	
vol I	1950, 2 ^e éd. 1967
vol II	1952, 2 ^e éd. 1970
vol III	1956
vol IV	Exposé méthodologique et tables 1969

J. Séguy:

Atlas linguistique et ethnographique de la Gascogne	
vol I	1954, 2 ^e éd 1965
vol II	1956, 2 ^e éd 1967
vol III	1958, 2 ^e éd 1968
vol IV	1966

P. Nauton:

Atlas linguistique et ethnographique du Massif Central	
vol I	1958

vol II 1959
vol III 1961
vol IV Exposé général, table-questionnaire,
index alphabétique 1963

H. Guiter:

Atlas linguistique et ethnographique des Pyrénées
orientales 1965 (一巻で完結)

H. Bourcelot:

Atlas linguistique et ethnographique de la Champagne et de la Brie
vol I 1966
vol II 1969

E. Beyer et R. MATZEN:

Atlas linguistique et ethnographique de l'Alsace
vol I 1969

P. Dubuisson:

Atlas linguistique et ethnographique du Centre
vol I 1971

G. Massignon et B. Horiot:

Atlas linguistique et ethnographique de l'Ouest (Poitou, Aunis,
Saintonge, Angoumois)
vol I 1971

J.-B. Martin et G. Tuillon:

Atlas linguistique et ethnographique du Jura et des Alpes du Nord
vol I 1971

(近刊予定のもの, 略称)

Atlas de la Franche-Comté

Atlas de l'Île-de-France

Atlas de la Lorraine germanophone

(準備中のもの, 略称)

Atlas de la Picardie

Atlas de la Bretagne romane, de l'Anjou et du Maine

Atlas du Limousin et de la Basse-Auvergne

Atlas de la Provence et du Dauphiné provençal

Atlas du Languedoc occidental

Atlas de la Lorraine romane

Atlas de la Normandie

Atlas du Languedoc méditerranéen

Atlas de la Bourgogne

(他に, ベルギーのものとして)

J. Haust:

Atlas linguistique de la Wallonie

vol I 1953

vol II 1969

vol III 1955